

木村 滋

現在のスイス連邦共和国は「會議は頻る」で有名な一八四一五年のウィーン會議によつて成立し、以來世中立國としての地位を世界に認められています。それでもこの國には徴兵制度があつて、若者は兵營で訓練を受けており、戰國機がアルプスの上空を宙返りの練習をしています。山岳民族としてのスイス兵士がいかにも勇敢であるかについて、フランス革命の際にフランス宮廷の近衛兵として最後の最後まで闘つたのはスイス傭兵であつたという自慢話がいしばしばスイス人から聴かれます。

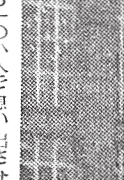
アルプスからは若干の塩産を除き何一つ鉱物資源は得られませんが、自然の美しさと厳しさのみを賦与されたこの國は、牧畜・酪農以外は労働のみが生活の糧を得る手段でありました。古くからの外國への傭兵志願もそのためたつたのです。しかし現在までにスイス國民はオヌガ、ローレック、ヘウアジニロン・コンスタンソンとかの最高級の時計工業やチバ・ガイギーなどの化学工業、そして世界にその特異な存在を知らせている銀行業を発達させてきました。自然資源皆無の國民が高度の技術によつて生きる姿を見た人々を驚かし、グリム童話「白雪姫」

紅はこの小人を想い出させます。しかしチェリッヒの小鬼はそんなやちな小人ではありません。私がある日訪れたベンダゲゼルシュフトの為器部長ツレイベル氏はキリーの選手で、その開朗快活さは義実のうちにうかがわれましたが、時々部下のキャンピスト(為器専門職)にキツとした自づきで取引の指示を与えていました。キャンピストたちは英種仏伊

等の数カ国語を自由に駆使して、電話一本で義叔のうちに何百万グロの為器を売買しています。

私は夏の二カ月間南ドイツ、バイエルンの生活を経てチェリッヒにやってきました。ニーダー・ドルフにあるF・ルツ教授の研究所を訪れたとき、教授が「ア

学
象に



チューリッヒ大学の正門

テーパーン＝運邦工科大学と仲
良く並んでいます。両大学で十幾
人かのノベル賞学者を生んだこ
うです。スイスの学閥が純粋理論
に専越しているのはその環境の所
産かもしれません。アルプス連山
を背景としたレマン湖畔のローザ
ンヌ大学の清澄な環境がローザン
ヌ学派アルプス流の透徹した一般
論議を生み出したといえるでしょ
う。

のいいしれぬ星さがあります。こ
 こでも経済学は数理経済学がさか
 んでいた。ある日寮が倒され
 私も招かれましたので喜んで参加
 しました。夜更けまで騒ぎ、音
 樂、ダンスを賑わい、やはり口方
 働いてばかりいてG.N.P.第二位を

「よく働き、よく遊ぶ」これが
 ユーロッパの学生や勤労者の生活
 についての印象です。あくせくと

誇っているも、一人一人の貧しさ
 から抜け出すことのできない日本
 人はいいたい。誰のために働いて
 いるのかを考えてみる必要があ
 るように思えます。

(商学部教授)

なると書物から求めるよりも自
 らの体験で会得してもよし、し
 なくてもよいと考えるようになった。

倉田忠雄

當日頃からしてても技術書に親しむ機会が多くて、一般的な読書の機会が少ない。三冊の本といっても余り専門書でも面白くないと思うので、今までの読書の中で印象に残っているものについて、感想をのべてみたい。

この書物は日本人がどのような過程を経て近代科学に近づいたかという工を説いている。古人の著書を随所に引用して、読者に切々と訴えてくる。著者に最大限の讃辞を捧げたいと感じた書物であった。

著「自己・宗派でない宗教」柏樹社などが迫力があつたと思う。いずれも神に關係した書物である。宗教というよりも人生観という点で印象に残っている。

もう一つ、不思議な印象を残した書物として金子光晴「絶望

エンジニヤの件事といふものは万国共通で、普遍性があるけれども、日本人としての性格からみてその発想とか、過程には特色があるように考えられる。そんなわけで一時それらに関連性のある読書をしたことがあつた。その中で印象に残つたものは中村元選集の中の最初の四巻「東洋人の 思维方法」であつた。一卷から四巻までにインド人・中国人・日本人・チベット人の思维方法について述べている。

それから日本人の考え方と相違しているところに驚いたのは、イザヤ・ベンダサン氏の『日本人とユダヤ人』であつた。この書物については各所で紹介されてゐるので省略する。その後のベンダサンものは余り感銘を受けない。むしろユダヤのタルムードの紹介のほうが面白かつた。タルムードはユダヤの教典といふが寓話集といふか、人生の道しるべになる膨大な刊行物といふのである。

以上、日本人の技術的特質と想い出すことがあつた。

著者はインド哲学や仏教などの専門家である。東洋人の諸文化現象にあらわれた思想の多岐な特長を説いている。この仏教の受容形態からみた特長を重点論なども読んでいたが、近頃に

以上、民族的な考え方やおよび人生観からのもの三種類と、一技術者の拙い読書の内容として示した次第である。

(工学部教授)

► 編集後記 ◀

の實力を發揮しうるよう、
関西大学の名において教職
員並びに関係者が一致協力
し万善を尽さなければなら
ない。受験生諸君もまた上
学の指示に従かつて無事最
後まで頑張つて欲しい。

そのなかで入学試験が実施されているが、受験生諸君が平靜に受験して日ごろ

リ
レ
ー
随
想

森井 障

るによると、「法」という字は略字なそうである。すでに日本へ漢字が伝来した時から略字だったために古字の方はあまり知られていないが、なるほど大きな漢和辞典をみると、ちゃんと古字は「灋」と記してある。なんともむずかしい字であるが、その意味は二つあって、一つは「撞」という想像上の動物のことを表わし、もう一つは「堰」を意味するらしい。「解」という動物は、サイのよしがらみを置き、堤防を築くことによると、うな一角獣で、いつも同じ道を歩み踏み違えずに往来するのだという。「堰」はまさに水の流れに道筋を与え、氾濫を防ぐものである。

こうなると、どちらからもう「法」の意味がでてきてもおかしくはない。

語句の談義が長くなったが、そもそも「法」はコンサヴァティブなものである。未来へ向かつての滔々たる流れに堰を設けしがらみを置き、堤防を築くこと、法がブレーキだとすると、理想のセイフティ・カーにはブレーキは要らない。未来の理想社会には法は不要である。ことに権力的な取り締り法が真先に死滅することになろう。刑法・刑事訴訟法を専攻する私など、さ

が存在するかぎり、さしたるの関心は、ドライバーの恣意を抑えてスムーズに作動するブレーキを開発することである。流れを強引に押し止めたり、ねじ曲げたりするのではなく、流れの方向を適確に見定めて「水を去らしめる」法が必要ということになる。「灋」という字が「法」に変わってきたことも、例外、法の未来を先取りしていかとも知れない。

(法学部助教授)

環境よい チューリップ 大学
「よく働き、よく遊ぶ」が印象に

大 学	創 立 年	1967/68 冬のゼミ ス タ ー
パーゼル	1460	3737
チューリッヒ	1833	7408
ベルン	1834 (1523)	4464
ジュネーヴ	1873 (1559)	5035
フライブルク	1889	2838
ローザンヌ	1890 (1537)	3136
ノイエンブルク	1900 (1823)	1191
ザンクトガレン	1899	1265
ETH	1855	5097
エコーレ・ポリ テクニーク	1853	1143

()内は前身の研究所創立年

ノッティンハム大学の寮祭